

上羽剛史

世の中が平和になると、人は旅をしたくなります。ルネサンス期からヨーロッパの人びとの心に根付いていた古代ローマの文化への憧れは、段々と安定してきた社会の中で「実際にイタリアに行ってみたい！」という願いに結晶しました。

17世紀のイギリス上流階級の子弟に始まった旅行熱は、18世紀までに北ヨーロッパ全体に広まり、学業を終えたばかりのたくさんの裕福な若者たちがローマを目指しました。「グランドツアー（大旅行）」の時代です。

若者たちが惹きつけられたのはローマばかりではありません。経由地のパリやヴェネツィアでも最新の流行や絵画・オペラなどの芸術に触れ、社交界に必要な作法や教養を学びました。

旅の出発地ロンドンの劇場では、大作曲家ヘンデルが仕掛け人となって、イタリア語のオペラが大盛況。観客たちはイタリアの文化への憧れをかきたてられました。ロンドンの興行でヘンデルのライバルだったのがナポリ出身のニコラ・ポルポラでした。モテット《天で明るい星々が輝き》は、そんな作曲家のラテン語によるモテットで、オリジナルの楽譜は大英図書館に所蔵されています。作詞者不明ながら、美しいテキストと、オペラ作曲家らしい技巧的なパッセージによって、牧歌的な風景の中で神の愛が語られます。

イタリアと並ぶヨーロッパ文化の中心地パリは、グランドツアーの重要な経由地のひとつでした。イギリスからドーバー海峡を渡ってきた若者たちはパリに数週間、ときには数ヶ月も滞在して、最新の流行・作法を学びました。アルマン＝ルイ・クーブランが1751年に出版した《クラヴサン曲集》は、当時のパリのロココ趣味が音楽で表現されています。「ラ・シェロン」はオペラ座の音楽監督だったアンドレ・シェロンの音楽による肖像画で、その優雅な作風は「楽しみ」の快活なキャラクターと好一対をなしています。

イタリアに入ると旅行者たちは必ずヴェネツィアに立ち寄り、やはり長く逗留したようです。この街で活躍したアントニオ・ヴィヴァルディは、当時からヨーロッパ中で有名だったイタリア人作曲家でした。《チェロ・ソナタ 第6番》は、1740年頃にパリで出版されたチェロ・ソナタ集の1曲で、生前に出版された数少ない室内楽作品のひとつです。「緩－急－緩－急」からなる典型的な教会ソナタの形式によっています。旅の目的地のひとつだったパリでも、イタリアの音楽は大流行していました。パリでヴィヴァルディの作品として出版されたソナタ集《忠実な羊飼ひ》第6番ですが、実はフランス人ニコラ・シェドヴィルによる「贋作」ということがわかっています。ただし、少なくとも第4楽章についてはヴィヴァルディのヴァイオリン協奏曲（RV316a）の編曲で、他の楽章についてもシェドヴィルがイタリア様式を深く理解していたことは明らかです。

グランドツアーの終着地ローマでは、オペラの中心地で音楽教育が最も盛んだったナポリと近いこともあり、オペラが頻繁に上演されていました。旅行者たちは、昼はローマ帝国の遺跡を訪れ、夜は劇場通いでオペラを楽しんだに違いありません。ナポリとローマの双方で活躍した売れっ子オペラ作曲家アレッサンドロ・スカルラッティのカンタータ《まこと、君ゆえ愛に身を焦がし》では、美しい女性に恋する若者の悩みがオペラ顔負けの表現で語られます。